

# 米原歴史街道

米原市の歴史・文化財を歩く 108

## 願乗寺の梵鐘

— 滋賀県指定文化 —

### 賤ヶ岳合戦の陣鐘

願乗寺（中多良）の山門に懸けられている梵鐘は、滋賀県の指定文化財です（平成二四年三月一九日）。南北朝時代のもので保存状態も良く、作風の特徴がみられ、鑄造した集団が推定できる、工芸史上貴重な作例として評価されています。

総高九三・五センチ、鐘本体の高さ六八・四センチ、口径五五・二センチの中型の梵鐘です。撞木（突棒）でつく撞座を四か所に配置した四方撞座と呼ばれる、きわめて異例の形式の梵鐘です。梵鐘の池とよばれる区画には、（第一区）「諸行無常／是生滅法／生滅々已／寂滅為樂」という『大般涅槃經』の教えと、（第四区）「近江国伊香郡余呉庄／菅並之村岩本寺六所／権現鐘也／応安元年戊申八月一日」の刻銘があり、応安元年（一二六八）に近江国伊香郡余呉庄菅並村（長浜市）の岩本寺六所権現（現在の六所神社）の鐘として製作されたことが記されています。この岩

本寺の詳細はわかっていません。

『改訂近江國坂田郡志』には、この鐘にまつわる話として、菅並村から願乗寺に嫁いでこられた方が持参したものと伝えられています。また、羽柴秀吉が賤ヶ岳合戦の陣鐘に使用したともいわれ、参陣した黒田官兵衛も乱打されるこの鐘の音を聞いたのかもしれない。

### 製作者の推定

銘文には製作者である鑄物師の名前は記されていませんが、その形態から大津市明王院の梵鐘が類例としてあげられます。この鐘は高さ五七・五センチ、口径四四・三センチと、願乗寺鐘よりさらに小ぶりです。銘文から貞治二年（一二六三）に橘末安と名乗る鑄物師によって製作されたことがわかります。願乗寺鐘と同様、四方に撞座を備えていて、南北朝時代の四方撞座の梵鐘は、全国

でもこの二例しかありません。

さらに注目すべきは、撞座の八葉蓮華文で、幅広く先端の尖った花弁は願乗寺鐘と共通しますが、明王院鐘のほうがより複雑で、先行性がみられます。両鐘の製作年代の差はわずか五年で、ほぼ同時代の製作と考えられることから、おそらく同系統の工房、すなわち明王院鐘を製作した橘末安もしくは橘姓を名乗る鑄物師によって製作された可能性が高いとみられます。橘姓を名乗る鑄物師が初めて見られるのは、暦応二年（一二三九）に近江国伊香郡横山大明神鐘を製作した橘末継で、これに次ぐのが明王院の鐘です。ともに近

江の鐘であるため、橘姓鑄物師の本拠地も近江にあつたと推定されますが、横山大明神の鐘は改鑄されて現存せず、明王院鐘が橘姓鑄物師の唯一の作例で、願乗寺鐘は橘姓の鑄物師による現存二例目の製作と考えられます。願乗寺の鐘は、不明な点の多い橘姓鑄物師の解明の手がかりとなりうる作例としても重要です。願乗寺は、天台宗の蘭華寺を前身とし、一宮寺とも称しましたが、のちに蓮如上人に帰依して願乗寺と改めました。境内には後鳥羽上皇の御落胤一ノ宮皇子の墓といわれる五輪塔があります。

（歴史文化財保護課）



▲願乗寺梵鐘